悪魔はあの日の約束を忘れずに

柳之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔はあの日の約束を忘れずに

【Ｎコード】
Ｎ６７６５Ｙ

【作者名】
柳之助

【あらすじ】
「いつかまたここで会おうね」

雪の降る中そう言って繋いだ小指は涙が出るくらい暖かかった。
これは約束を交わした少年と少女が再び巡り合うまでの物語。

約束

序章

１９９９年１２月２４日

雪が降っていた。
息は白く、震えるほど寒い。
ぱらぱらと舞うように小さな公園へ。
黄昏時だが、空は曇り薄暗い。
公園にいるのはまだ幼い、少年と少女。
少女が言った。

「ねぇ、約束しよう」

やくそく？と少年が首を傾げた。

「そう約束。小指を出して」

少年と少女の小指が絡まる。

「私はここに来るのは難しいの。今日あなたに会えたのもたまたまだから」

「じゃあ、次いつ会える？」

「わからない」

だから、

「約束するんだよ。あなたにもう一度会ってみたいから。……それともあなたはもう私と会いたくない？」

それは。

「……会いたい」

その答えに少女は、

「じゃあ……何時になるかわからないけど、」

小指に力を込め、笑ってくれた。

「いつかまたここで会おうね」

雪の降る中そう言って繋いだ小指は涙が出るくらい暖かかった

それは、かつての記憶。
少年と少女の始まり。
叶わぬ再会を願った二人に残ったのは繋いだ小指だけだった。

約束（後書き）

感想、指摘などお願いします。

日常

丘の上に建てられた学校。
明成学園。
広大な敷地に小等部から大学部までを持つ巨大なコの字型マンモス学園。
生徒数六千人強という人数を誇り明成市のほとんどの学生が在籍している。
そこに昼休みを知らせる鐘が響く。
動き出す生徒の中、動き出さない生徒もいる。
高等部校舎の『壱―B』と定められた教室に彼はいた。
興味ないと言わんばかりの無造作な黒髪。
気だるげな黒い瞳は外を見つめて、肘をついている。
窓の外には十二月初めの街並みだ。
昼食を取ろうとする生徒がいる中、彼は窓際の席で動かない。
おおよそ気力の欠片もない少年だったがよく見ればそれなりに顔立ちは整っている。
制服である黒の学ランを着こんでいる。
もっとも、良く見ればの話だったが。
放っておけばずっとそのままでいそうな少年に近づく影がある。
音を立てずに近づいてくるが、

「何してるんだ、宋真」

あと二歩くらいの所で、気付かれた。
宋真と呼ばれたのは、長身の少年だった。
着崩した制服に腕章、肩までの茶髪を持つ彼は、

「何をしてるか、はこちらのセリフだ。駆」

腕を軽く広げ肩をすくめて、

「昼休み、昼休みだぞ駆。放課後と並ぶ学校生活のベストタイムじゃあないか。その時間にお前は何をしている？」

「何も」

駆と呼ばれた少年は窓の外から視線を外さずに答える。

「ならば駆よ。食堂に行こう。今日は新メニュー『マリアナ海溝海鮮炒飯チョモランマ盛り』が出る日だ。逃すわけにはいかん」

茶髪の少年――相馬宋真は断言し、

「海なのか山なのかはっきりしてほしい名前だな」

黒髪の少年――黒崎駆は嘆息した。
そこでようやく駆は窓の外から視線を外し、席を立つ。

「わかったよ、宋真。行こう」

「うむ。では行こう。チョモランマのように高く、マリアナ海溝のように深き彼の地へ！」

「行くのは食堂だ」

「いやいや。これは新メニューがとても高額で、そのせいで俺の財布が絶望にたたき落とされるというハイセンスなギャグでな」

「五十五点」

「こりゃ手厳しい」

よくわからない掛けあいをし、教室を後にする二人だった。

・・・・・・

明成学園食堂。
苦学生からセレブ生徒まで、少しでも食べたら気持ち悪くなる生徒から気持ち悪くなるまで食べる生徒までいる明成学園の食堂は当然のようにメニューが豊富だ。
タダでもらえるパン耳に始まりとある名言を残した偉人とサヨナラしなければならないほどコースメニューまである。
豊富なメニューは未だ追加され続けており本日追加されたのが、食べても食べても気持ち悪くならないバカ――相馬宋真の前にある『マリアナ海溝海鮮炒飯チョモランマ盛り（三〇〇〇）』である。

「お、おお……！」

喧騒に包まれる広い食堂で尚目立っている。
四人掛けの机を占領し置かれているのは直径三十センチはある皿に高く積まれた海の幸たっぷりの炒飯。推定高度またもや三十センチ。
文字通りの山盛りでいいが漂い、白い湯気が立ち上る。

「さすがマリアナでチョモランマな炒飯。食べ応えがありそうだ……！」

専用のレンゲを構え、舌なめずりをし、

「では！」

食べ始める。
それを向かいの席から見ていた駆は、
……さすが『三バカメニュー』……。
『バカが頼むバカな名前のバカ盛りメニュー』。
宋真が頼んだ無茶苦茶メニューの俗語である。
目の前で宋真が喰らっている炒飯はその名に恥じぬ量だ。
しかし。

「ははは。フードファイターの魂が高ぶるなぁ！」

「いつからお前はフードファイターになったんだ？」

ものすごいペースで消える米の山を見ながら、宋真から飛び散る米を箸で器用に叩き落としながら突っ込む駆。
ちなみに駆が頼んだのは日替わり定食（六八〇）である。

「無論、生まれた時から！」

「アホか」

「何がだ？」

声は宋真でも駆でも無かった。
駆の席の後ろ。お盆をもってこちらを見る少女がいる。
一七〇センチ以上はある長身と胸の膨らみ大きな少女だが、目を引くのはその髪と目だ。
朱色。
鮮やかな朱色の長髪をサムライポニー。同じく朱色のツリ目。

「む、長光か」

「……」

朱色の少女――長光カンナを呼ぶ宋真に彼の口から飛び散る米粒を無言でまたも叩き落とす駆。
……汚い。
思いつつも口には出さない。

「座らないのか？　カンナ」

替わりに後ろに居るカンナに声を掛ける。

「おう」

駆の横に座るカンナが持つのは『和定食（七七〇）』。

「で、なんの話だったんだ？」

カンナが割り箸を割りながら問い、

「宋真がアホという話だよ」

駆が定食のあじフライを食べながら答える。

「なんだ。――いつものことじゃん」

「ははは。そうほめるな」

「……」

「……」

思わぬ宋真の反応に黙る二人。

「今の会話に照れる要素があったか……？」

「うむ。いつも妹から『兄上はすばらしいアホですね』とよく言われるな」

「宋真の妹って三つ下の恵真ちゃんだっけ……？」

「そうだ。カンナは会ったことが無かったな。言わせてもらうが実にプリティーな妹だ」

「アホだ……しかもシスコンだ……」

呆然と呟くカンナ。

それには気付かなかった宋真はふと思い出したように、

「そういえば、お前たちは放課後予定はあるか？」

「……どうした？　いきなり」

弾かれる米をひたすら叩き落とす駆

「いや、生徒会関係で買い出しに行かなくてはならなくてな。付き合わないか？」

『高等部生徒会庶務』それが宋真の学内の肩書である。

「いつも思うんだけど、なんでお前が生徒会に入れたんだ？」

腕の『庶務』と書かれた腕章に目をやるカンナ。

「人得だ、人得」

ふふん、と得意げの鼻を鳴らす宋真。

そこに、

「悪いが」

口を挟んだのは駆だった。

「バイトがある。パスだ」

「あ、アタシも」

駆が断り、カンナも続く。

「ああ。そうか、例のバイトか。ならばしょうがないな」

うんうんと、二回頷く宋真。だがふと思い出したように、

「ならば、すぐ今日は帰るのか？」

「いや、夕方までは時間つぶしに教室に居るつもりだ」

「アタシはすぐ帰るけどな」

そうか、と一回思案げに頷く宋真。

「どうした？」

「いや――」

宋真は何故か口元を歪め、

「何でも無い」

黄昏

日が落ちていく。
冬の季節故に暗くなるのが早い。
明成学園の放課後には様々な音がある。
コの字型の校舎の内側にあるグランドでは野球部のノック音やサッカー部員が叫ぶ声。　どこかの教室からは楽器を奏でる音がある。
帰宅途中の生徒たちの喋り声もありそれらが放課後の音が作られる。
日が沈みつつある教室で黒崎駆はそれらの音を耳にしながら明成市の街並みを見つめる。
明成学園は扇形の明成市の端にあり、校舎からは市の全容を見ることが可能だ。
学園がある丘の下からは住宅街が多くあり、遠く街の中央には娯楽施設や公共施設がある。
そして。
それらよりさらに向こう。
何もない、正確にいえば瓦礫ばかりの空白地帯がある。
十年前の十二月二十五日。
その日、明成市と隣接する二つの市を震源地とした地震が起きた。
震度七を記録した大震災。
それはあっさりと。
あっけなく。
当り前のように。
全てを破壊した。
十年の月日が流れた今、いくつかの企業が復興作業を精力的に行ったがしかし爪痕は確かに残っている。
現に明成学園では一人暮らしの生徒や寮暮らしの生徒が多い。
駆自身も一人暮らしだ。

十年前に地震で家族を失った。
とある男に引き取られ、息子になり一時はこの街を去った。
その養父も五年前に死んでしまった。
そして明成市に戻ってきて今に至るのだ。
あの空白地帯を見るたびに思う事だ。
もっともそれは、この街に住む人々ならば誰でも。
何かしらの思う事はあるだろうけど。
そこまで思った所で。
がらりと、教室のドアが開いた。

「あれ？」

振りかえった先。
学級日誌を胸に抱えた瑠璃色の少女がいた。
柔らかく整った顔に起伏にとんだ身体付き。
白い肌は処女雪のようで唇は桜色。
そして。
深く吸い込まれるような瑠璃色の髪と瞳。
髪は腰まで伸びていて夕焼けに煌めく。
瞳はややたれ目気味で柔らかい。
彼女は駆を見て少し眼を見開き、

「こんにちは、かな。黒崎君」

にっこりと笑った。
それに対し、

「……もう夕方だよ、雪村」

疲れたように答える駆に雪のような少女――雪村沙姫は再び笑った。

・・・・・・

「わたしは日直だったんだけど、黒崎君はどうしたここに？」

「……別に。バイトまでの時間つぶしだ」

……宋真め、知ってやがったな。

思わず、心の中で毒づく。

食堂での宋真を思い出す。

「そう」

にっこりと笑う雪村。
そのまま自分の席に向かう。クラスの真ん中の席だ。
抱えていた学級日誌を開き記入しだす。
すこしだけ彼女を眺めていた駆も再び窓の外を眺める。

「……」

「……」

ふたりとも言葉はない。ただ放課後の音と日誌へ記入するペンの音だけがある。
駆はただ外を眺め続け、
雪村は日誌へと記入を続ける。
どれだけ時間が経っただろうか、あまり経っていなかった気がする。
ふと、雪村が席を立った。
雪村は席を立ち、こちらを見てニッコリと笑い、

「日誌、出してくるね」

「……そうか」

駆も雪村に視線を送り答える。
教室を出るまで眺め、また視線を窓の外へ。
雪村の足跡が聞こえなくなった所で、思わず息がこぼれ、机に突っ伏す。
……余計な事を。
宋真は雪村が日直で遅くまでいる事を知っていたのだろう。
何故それを駆に黙っていた理由は理解出来てしまう。
……というか気付いとけよ。俺。
朝からずっと外を眺めていたから気付かなかったのか。
……不覚だ。
そう思い、顔を上げる。
下を見れば下校中の生徒も数少ない。
住宅街では灯りが増えてきている。
直に夜だ。

「……行くか」

席を立ち、カバンを手にする。
扉の前に立つ。
扉を空けようした所で、

「あれ？帰るの、黒崎君？」

先に開いた所に雪村がいた。

「……ああ」

……狙ってるんじゃないか？

「そう。じゃあね」

にっこりと笑い道を空ける雪村に、

「……じゃあな」

それだけ言って教室を出た。

・・・・・・

日が半分程落ち、気温も下がった学園の正門。
そこを歩く少女がいる。
雪村沙姫だ。
彼女は一人きりで正門を越え、ふと、振り返った先には

「帰ったんじゃなかったの、黒崎君？」

黒崎駆がいた。

「……トイレに行っていたんだよ」

「ふうん、そっか」

笑顔を浮かべた雪村は少し首を傾げ、

「ねぇ、黒崎君」

「なんだ？」

「途中まで一緒に行かない？」

・・・・・・

「……」

「……」

学園の正門から百メートルほどの坂。
そこをゆっくりと歩く。
黒崎駆と雪村沙姫が肩を並べ、しかし、二人分ほど間を空けながら。
言葉は無い。
駆は無表情で。
雪村は笑みを浮かべながら。
歩く。
一歩ずつ。
ゆっくりと。
しっかりと。
道を踏みしめる。
それでも十分もかからずに坂を下り、

「じゃあ、わたしこっちだから」

「……そうか」

雪村は住宅街の方角へ、

駆は街の中心の方角へ向かおうとする。

「そういえば黒崎君、今日はどんなバイトなのかな？」

突然の問いに、駆は頬を軽くかき、

「……猫探しだよ」

「そう」

雪村は黄昏を背にし、

「いってらっしゃい」

微笑んだ。

魔術

「なるほどね」

明成市の中心部。それより少し外れたところに一軒の喫茶店がある。

喫茶『ルイーナ』。

そこに駆たちと一人の青年がいた。

カウンター席の向こう、バーテンダーの服に長身を包み、艶やかな長い金髪を首あたりで結んだ青年が納得したように頷く。

「駆がまたハーレムメンバーを増やしたってことか」

青年に駆の手刀が振り下ろされた。

頭を押さえてうずくまる青年に、カウンター席に座っている駆はあきれた声をかける。

「誰のハーレムで誰がいるんだって？」

瞬く間に復活した青年は、

「カンナちゃんに、どっかの騎士団の女の子も引っかけてたよね。そしてリーシャちゃん。やったね、三人目だ」

再び駆の手刀が青年に振り下ろされる。
またもやうずくまる青年に駆は隣に右に座っているリーシャに目を向ける。

「悪いな、リーシャ。これ――頭おかしいんだ」

「ふむ、それは今の会話で理解できるが、何だこれ？」

うずくまっている青年を指さして駆に尋ねる。
――いきなりコレ呼ばわりね
いきなりファーストネームを呼ばせたり、なかなかに馴れ馴れしい。
しかし気にせず大きくため息をつき、

「ライアス・デライト。しがない喫茶店のマスターだそうだ」

「ちなみに魔術もかじってるよ」

またもや高速で復活したライアスになにやら駆が半目を向けてい

るところに駆の左に座ったカンナが割り込む。
あのさ、と前置きし、

「いまさらだけど魔術ってなんだ？」

瞬間、駆はその場の空気が軽く凍ったように感じた。

「なっ、なんだよっ」

「……俺だって魔術を使ってるだろ？」

「知ってるけど、駆のはよくわかんないんだよ」

「確かに駆の魔術は我が強いからねぇ」

よし、とライアスが頷き、

「カンナちゃんのために魔術について説明しようか。ちょうど本職もいるしね。捕捉頼む
よリーシャちゃん」

「構わないが、ちゃん付けはやめてもらおう」

「じゃあ頼むよ。リーシャちゃん」

「……」

駆は半目でライアスをにらむリーシャの肩に手を置き、

「こういう性格だから気にするな」

……いちいち反応してたら話が進まないからな。

ぱしん、とライアスが手を鳴らした。

「さて、まずは魔術の成り立ちについて話そうか。カンナちゃん、いま最も多く使われている魔術――術式が何だか知っているかい？」

「知らん」

「即答かよ……」

かなり呆れている駆を余所にカンナはあっけカランと言い放つ。

「知らないから聞いてるんだぜ」

「ごもっともだね。答えを言おう。現在この世界の九割五分を占めている術式、それはね、『祈祷式』って呼ばれるものだよ」

「祈祷式？」

「そう、祈り願うことによって力を持つ術式だよ」

ライアスはそこで一度区切り、右手の人さし指を天に向け、左手を右ひじに付ける。

……教師かよ。

駆の心のツッコミに気付いたのか、気付いてないのかライアスの講義は続く

「今から千五百年以上前、この世界にはありとあらゆる種類の術式があった。それこそ魔術師の数だけにね。新たな術式が創りだされては消えていた。そして、それに終止符を打ったのが、クリスチャン・ローゼンクロイツという男だったんだ」

まぁ、今この人は関係ないけどけどな、と駆も一応捕捉しておく。

「終止符って全部一緒にしたとか？」

「惜しいね、一緒にしたんじゃなくて、まったく新しいを創ったんだよ」

「じゃあ、それが……」

「そう、『祈祷式』だよ」

なるほどと納得したように頷くカンナだったがすぐに首をかしげた。

「でもさ、そんなにすごいのか？それ」

「すごいっていうか全然違ったんだよ、今までの術式とね」

いいかい、と楽しそうに笑い、

「それまでの魔術っていうのは、血統や才能などの先天的な長所で魔術師としての力量が

決まっていたんだ。けどね、『祈祷式』に必要なのは『願い』だけだったんだ。」

「そんなんで魔術が使えるのかよ」

「うん、『祈祷式』っていうのは『願い』という概念を魔法陣の核として固定し、それに魔力を込めて魔法陣を完成させ発動する、っていう術式なんだ。」

「それだけか？」

「うん、それだけ」

理解しきれていなくて首をひねっているカンナを楽しそうに見ているライアスにリーシャが、

「この男、教師には向いていないだろう」

駆も同じ気持ちだった。

二人を気にせずにライアスは続ける。

「つまりさ、それまでのいわゆる大魔術は発動にいろんな礼装が必

要だったり、制約があ
ったんだ。そんなことをしてたらコストも時間もかかる。でも『祈祷式』なら必要ない。願えばいいんだからね。もちろん『祈祷式』でも術式が高位であればある程時間もかかるけど、お金はかなり浮くからね」

「って、金の問題かよ」

カンナのツッコミに肩をすくめるライアス。

「世の中そんなもんだよ。魔術の研究はお金がかかるしね」

「じゃあ結局金がかからないから今も使われてるってことなのか？」

「いや、最大の理由は汎用性だよ。そのあたりは駆から聞いたほうがいいんじゃない？」

と、カンナとライアスの視線がこちらに向く。
……なんで俺が。
拒否しようとするが右からも視線が来ていた。
三人が引き下がることは無く、駆は口を開く。

「今、最も数の多い役割（クラス）の三つくらいは知ってるな？」

「魔術師、聖職者、騎士だろ？　それくらいは知ってるぜ」

「ならその存在意義は？」

「……」

「無知にも程があるな」

くわっ、とカンナが目を見開きリーシャをにらむが、目を反らされる。

「そう言わないでよ。カンナちゃんは陰陽寮の所属だからね。あそこは閉鎖的すぎて外の情報が回ってこないんだよ。」

ライアスのフォローに感謝しつつ言葉を続ける。

「いいか、それぞれ目的があるんだよ」

魔術師は世界の理を操ることを望み、
聖職者は神の席に座ることを望み、

騎士は主に仕え、主にすべてを捧げることを望む。
そして、
世界の理を操る魔術師を魔法使いと呼び、
神の席に座れる聖職者を聖人と呼び
主にすべてを捧げられる力を持ってしまった騎士を王と呼ぶ。
基本的に彼らはそれらに至ることを望む。
だがそれは、

「結局は同じことだったんだ」

「……？」

「世界の理を操るには、神の座へと至るしかない。神の座へと至るにはすべてを得るしかない。すべてを得るには世界の理を操るしかない。同じだろ？それらの差は己か神か、自らの主か、どれに依存するかの違いなんだよ」

望むことも同じなのだけれど。

「じゃあ、心構えの違いってことか。……あれ？　話ずれてないか？」

「ずれてない。いいか？　同じことを願うなら、願いの形は違っても種類は同じだ。」

つまり、

「魔術師であろうと聖職者だろうと騎士だろうとそれ以外の何であろうと『祈祷式』を使えば一緒だ。これが最大の理由。ライアスがいっただろ？　祈り願うだけ。統一すれば、誰かが一人でも至ることができれば同じ事が出来ると考えたんだろ。だが……」

「ダメだったのか？」

「ああ。」

ふと目を遣ればリーシャが苦い顔をしている。同じ魔術師として思うところもあるのだろう。

「同じ存在なんていない。百人いれば百通りの至り方がある。だがこれを理解したのは
『祈祷式』がすでに世界に広まったあとだった。結局使いやすさで今日まであらゆる人間が使っているってことだ。以上、終わり。」

ふー、と長い溜息をつき、姿勢を軽く崩す。

「というわけだ。判ったかい？　カンナちゃん？」

ああ、というカンナが頷く。
そして、リーシャが口を開いた。

「……そろそろ本題いいか？」

「ん？　ああ。どうぞどうぞ、リーシャちゃん」

あくまで軽いノリのライアスを半目で数秒にらみ、腰のポーチからスマートフォンを取り出し操作する。そして表示されたバストアップ画像を机に置く。
学者風の痩せた青年。くすんだ藍色の髪と瞳。
背広に白衣といった服装だ。

「ハイア・セルテ・ガードナ。魔術師だ」

青年の写真を駆たちに見せ。

「専攻は操影術に――」

駆を見据え、

「特異点だ」

へぇ、とライアスは顎に手を当て。
え、とカンナは声を上げ。
駆は、

「……」

ただ、目を細め、

「面白い事になってるわね」

新たな声を聞いた。

「！！」

リーシャが席から弾かれるように立ち上がる。
ウエストポーチに手を伸ばし、

「何者だ！！」

「ここの住人よ。余所者さん」

さらりと答えたのは店の奥の扉から出てきた桃色の髪をツインテールにした少女だ。

中国の民族衣装――いわゆるアオザイを着ている。

「少苺音（シャオメイシェン）。シャオでいいわ」

身長百三十センチもないシャオは駆たちの後ろのテーブル席に座り、こちらに体を向けて足を組み小さな体で偉そうにふんぞり返り、

「取って食やしないわよ。座りなさい、小娘」

「こむっ……！」

小娘と呼ばれ、怒りを露わにするが、

「やめとけ、リーシャ」

溜息と共に駆に止められる。

「シャオは子供に見えても実際は俺やお前より年上なんだよ」

「な……！」

「そういうことだからとっと座りなさい。余裕が無いわね、コ・ム・ス・メ・は」

「く……」

小娘の部分を強調されて顔を顰めるが椅子に座り、ボソッと、

「……合法ロリか」

「なんですって！」

……余裕も何もないな。

「二人とも沸点低いな……」

小さな、本当に小さな声でカンナが呟いた声が聞こえた。

「はいはい」

ライアスが手をたたき、音を立て、

「いい加減真面目な話をしようよ。ほらリーシャちゃん、そのナントカの話をしてよ」

……コイツに諭されるとムカつくな。
同じ事を思ったのかリーシャも眉をひそめるが、

「ハイア・セルテス・ガードナだ」

「魔術師だな？」

「ああ、さっきも言ったが専攻は操影術に特異点。三年前に『学会』の教導院を主席で卒
業し、三か月前まではイギリスに自分の工房を持っていて、数日前
にはこの街に入ったらしい」

「三か月前までは……か、なにがあった？」

「それが、今回私が駆り出される理由なんだがな……」

溜息、そして。

「この男はな、イギリスの小さな一般の村を消したんだ」

「は？」

カンナの間の抜けた声が響く。
だが駆は納得し、それはライアスやシャオも同じだった。

「なるほどね。教導院を主席ってことはエリートだ。その彼が一つの村を消したっていうのは結構なスキャンダルだね。そのもみ消しで『学会』とは仲がいいわけではないけど敵ではない『刻印の家族』のリーシャちゃんが駆り出されるわけだ」

「こっすい手ね。頭のいかれた『学会』の連中らしい手だわ」

「まったくだな。いい迷惑だ」

「なぁ、村を消したって、何かの魔術で吹き飛ばしたのか？」

カンナがどかーん、という両手を広げる。
その仕草にあきれた視線を送りつつも、

「いや、吹き飛ばしたのではなくかき消された、と言った方が正しいな」

「……？」

「村の住人も建物も跡形もなく消えていたが、土地自体には傷一つなかったらしい」

「……操影術か」

駆が納得したように呟く。

「ああ。おそらく何らかの高位の影系統の術だと思われるが詳細は『学会』もわからなかったそうだ」

「彼自身のオリジナル術式って事かな？『学会』の連中がわからな

いなんて」

「はっ。どーせわからない振りでしょうよ」

シャオが吐き捨てるように言う。
……どれだけ嫌いなんだよ。
昔、いろいろあったらしい。

「ともかく、この男に執行指定が下されたのが二か月前。その間世界中を飛び回って追っかけていたのだが、数日前にこの街に入ったらしい」

「何の為だ？」

「わからん……だが」

「だが？」

「こいつは教導院時代から『特異点』をかなり嫌っていたらしい」

「……そうか」

眼を閉じた駆は手を組み口元に当て思考する。

「それで、どうするのかしら？駆。大分面白い事になりそうだけど」

「同時にめんどうくさそうだね」

「こちらとしてはある程度の協力を願いたいのだがな」

「ある程度ってどのくらいだよ」

「最低でも無力化して捕えたいな」

周りの意見を聞き流し、眼を開く。

「リーシャ」

「なんだ？」

「協力要請は受け入れる。ただし――」

「ただし？」

「邪魔はするな」

「……ああ」

「それで？　どういう方針でいくんだい？」

胡散臭い笑みを崩さないライアスの問いに、

「何時もと同じだよ」

ただ、当り前のように。

「障害は排除する、それだけだ」

・・・・・・・・

明成市のとあるホテルの一室。
そこのベットで横たわるのはリーシャ・ルーンファミリアだ。
先ほどの駆たちとの会合が終わってから一時間ほど。
窓の外はすでに明るい。
その結果を、目を閉じながら反芻し、思う。
……よし。
目を空ける。

「クロサキカケルとの協力は達成できた……」

それはリーシャの『父』であり『刻印の家族』の党首である人物から最優先にすべきことだと言われてきた。
黒崎駆。
彼についてリーシャが知っていることは少ない。
『観測省（アウトロー）』が定めた二つ名は『奇跡求める悪魔（デウス・エクス・マキナ）』、他多数あり。
どれくらいの強さを持つのかは知らない。
知っているのはその在り方だ。
『特異点』の守護者。

黒崎駆はとある『特異点』の少女を守り続けている。
始まりは五年前と聞いている。
五年前、明成市で『特異点』の少女の存在が確認された。
唐突に観測されたそれに対しどこよりも早く対応したのは『魔術学会』だった。
『特異点』捕獲専門の魔術師のチームが送りこまれ、その少女を捕獲しようとした。
この街に赴き、全滅された。
当時、十二歳の黒崎駆によって。
……出鱈目だ。
部屋の蛍光灯の光に目を細める。
『学会』直属のチームならば平均以上の戦闘力を誇ったはずだ。
それをたかだか十二歳の少年が撃退し、その後も撃退し続けた。
それがどれだけ困難なことか。
……私には絶対無理だな。
リーシャは魔術師としては一人前でも戦闘者としては二流の半人前だ。
その事実に自重の笑みが浮かぶ。
思い出すのは先ほどの黒崎駆の目だ。
彼はガレイシアのことを障害と言っていた。
つまりそれは、
……敵ですらないのか。
ガレイシアの事はただの障害でしかなく、似たような事をなんども経験してきたのだろう。
ただ、とある少女を守るために。
俄かには信じられない動機だ。
その動機をもって五年の月日にわたり、かの少女を守り続けている。
恐るべき強さだと思う。
あの鋭き刃のごとき瞳はその一端のはずだ。
それはリーシャには理解できない。

理解できないといえば、

「何故、あいつは五年も一人で『特異点』を守り続けている……？」

駆が男でその少女は当然女なのだから、普通に考えれば、

「愛……とかか？」

自分で言っていて胡散臭い。

……そういう男には見えなかったが。

「……むむむ」

考えてみるが、

「……よくわからんな」

思考を打ち切った。

体を起こす。

「ふむ。まぁ、とりあえずは」

シャツを脱ぎ棄て、艶やかな褐色の肌を無防備にさらし、

「シャワーでも浴びよう」

兄弟

息が白くなるほどの寒い夜空の下、黒崎駆はいた。

「……」

『明成私立図書館』と銘打たれた建物の屋上に片膝立ちでたたずむ。

地面に置かれた手のひらからは銀色の魔法陣が展開されている。

十二月半ばの深夜故にかなり気温は低いはずだがそんなそぶりは無い。

目を伏せ、動かぬままだ。

まさしく石像のごとく不動で時間が過ぎていく。

が。

「カケル」

背後からの声に目を空けた。

振り向いた先にはリーシャ・ルーンファミリアがいて、

「ほら」

手にした缶コーヒーを突きだす。

「……サンキュ」

……あったかいな。
指先からしみ込む熱を感じながらプルタブを空ける。
湯気が立ち上るソレを一気に煽る。
体にも熱がしみ込み、長い息が漏れた。

「それで、首尾はどうだ？」

「ダメだな」

駆はポケットから地図を取り出して広げる。
明成市の地図だ。扇状の街のほとんどが赤く塗りつぶされている。

「二週間かけてしらみつぶしに探してるが全く引っかからない」

駆もリーシャも肩をすくめ、溜息を吐く。
が、リーシャはにやりと笑い、

「文字通り影も形も見えないな」

「うまいつもりか、それ」

……どいつもこいつも。

自分の周りには面白くないギャグを言うヤツが多すぎると駆は思う。

「提案なのだが」

「ん？」

「ライアスたちにも手伝って貰ったらどうだ、あいつらだってタダの喫茶店のマスターなどでは無いんだろう？」

「無駄だ」

駆が即答する。

リーシャは驚き、訝しげに眉をひそめ、

「なぜ」

「そういう契約なんだよ。アイツらは情報提供と怪我の治療に後始末だけだ」

目を伏せ、思い出す。
五年前にこの街に戻って来た時、初めてあの二人に会った時のことを。

「そう、五年前に契約した」

だから、無理だ。

「……そうか」

駆に様子に察したのかそれ以上は追及せず、

「なら、ナガミツは？　アイツとはどういう関係だ？」

「アイツはいわゆる幼馴染だな、かれこれ六年目だ」

「ほう」

リーシャは僅かに面白そうに口元を歪めるが、ふと、

「しかし、お前に協力者がいるのは知らなかったな。『奇跡求める悪魔（デウス・エクス・マキナ）』は単独の代名詞だろう？」

……そんな代名詞は知らない。

「アイツは本当は戦う者じゃないからな。魔獣の討伐以外では連れてかないんだよ」

「ならばなんなのだ？」

「本人に聞け」

時計を見る。すでに深夜二時だ。

「今日はもう終わりにしよう」

「いいのか？」

「ああ」

白い息を吐く。

「このままじゃ埒が明かないからな。とりあえず、結界の強化をしているカンナを呼び出
して今日は上がろう……さすがに寒いし」

「ふむ、まぁ依存はないな……確かに寒い」

二人で、寒さに体を震わす。
駆は寒空を見上げ、

「さて、どうするか……」

・・・・・・

「どうすればいいのだ、駆よ！」

朝、登校してきた駆に宋真が教室の入り口で泣きついてきた。
跪き、縋りつこうとする宋真を駆は、

「……」

無言で避けて自分の席に着きカバンから筆記用具などを机に仕舞ってから、未だ教室の入り口に居る宋真に向け、

「どうしたー？」

「たまにお前との友情を疑うぞ……！？」

膝立ちで走ってきた。
滝のような涙を流しながら。
……怖っ。
思うがしかし、

「何を言っているんだ、兄弟。俺とお前の友情は不滅だ、さぁ何があったか言ってくれ」

「おお、兄弟！　実はな、恵真がクリスマスは俺と一緒に過ごしてくれないというんだ！」

「知るか」

「兄弟――――！」

涙の量が増した。

「恵真が！俺の妹が！アレが０歳の時から欠かさずアルバムを作っている俺の妹が、クリスマスを一緒に祝ってくれないなどありえんだろう！」

「お前のシスコン振りがありえない」

というか宋真は三歳の時からシスコンなのか。

「筋金入りだな……」

「ふっ、そうほめるな」

「ほめてない」

「はよー」

カンナが来た。
フラフラだった。
トレードマークのサムライポニーもしんなりしている。
おぼつかない足取りで駆の前の席に座り、

「うだー」

突っ伏した。

「どうした？お疲れのようだな」

「いろいろあるんだよー」

顔を上げずに答えるカンナ。
かなり疲労が溜まっているようだった。

「どうしたんだ、こいつ」

「いろいろあるんだろうさ」

彼女の疲労の理由には心当たりがあるも言うわけにはいかない。

「いろいろか……」

宋真が顎に手を当てて納得しかけたところで、

「にし、にしししし」

カンナがいきなり笑いだした。それもすごいにやけ顔で。

「……」

「……」

宋真と目が合う。

「……いろいろ大丈夫か？」

「……いろいろダメかもしれん」

二人で冷や汗を流した。

カンナは、

「にし、にしししししし」

未だ笑っていた。

家族

鐘が鳴った。
その響きを聴きながら屋上への扉をあける。
自由度が高い明成学園において数少ない立ち入り禁止区域の一つが屋上である。
本来なら入るには生徒会で面倒な手続きを踏む必要があるが駆は鍵を持っているので関係ない。
いろいろあって数カ月前に手に入れてからは一人になりたいときに重宝している。
昼休み。カンナと宋真は食堂に行った。
駆はとある理由によって急遽昼休みを返上して屋上にいるのだ。
とある理由それは。

「昼飯は食べたのか？」

「まだだ。だからとっとと要件言え」

リーシャ・ルーンファミリアがそこにはいた。

・・・・・・

四時間目の授業中。
窓の外を眺めていたら、校門から普通にリーシャが入ってきた。
かなり高度な認識阻害を掛けていたのか誰も気づくことなく、侵入し放課になってから魔力をたどって屋上にたどり着いた。
授業が終わり次第宋真やカンナを食堂に先に行かせて、教室を飛び出したのだが。
なにか、新しい情報が入ったのかと思い急いだのだが、

「……なんだって？」

「うむ。だから学校を見に来ただけなのだが」

思い切り脱力した。

「そんな理由で来たのか……？」

「うむ」

「……帰る」

踵を返し、屋上を出ようとしたが、

「まぁ、待て」

「……なんだ？」

肩を掴まれたので振りかえる。

「せっかくここまで来たんだ、少しくらい話し相手になってくれてもいいだろう？」

缶コーヒーが差し出された。

「……」

それを受け取りながらも、

「物好きだなお前」

・・・・・・・

「意外だったよ」

「……？何がだ」

屋上で二人してカンコーヒーを傾けながらリーシャが口を開いた。

「お前もナガミツも普通の学生でいることがだ」

一口含み、

「こういう世界にかかわりながら普通の学校に通っている者はそういないだろう」

「日本には結構いるけどな……」

「私の国は全くいなかった」

「お前の国って、北欧らへんか？」

「ああ。北欧の片田舎にウチの拠点がある」

その言葉に駆が首を傾げた。
リーシャもあ、と口を開けた。

「……言ってもいいのか？」

「……いいのか？」

二人で首をひねる。

「ま、いいだろう」

「いいのか」

缶コーヒーを傾ける。
一息。
「『ルーンの家族（ルーンファミリア）』なんていうくらいだから仲良かったのか？」
「そうでもなかったさ」
自嘲するような笑みを浮かべるリーシャ。
「魔術師という人間は基本的に利己的な者が多い」
「……当然といえば当然だろう。何よりも自己を尊重するのが魔術師という存在だろ？」
「ああ」
だからこそ、と彼女は言う。
「家族と言っても所詮は魔術師の集まりで、ほとんどが孤児か『失われなかった魔術（アンロストマジック）』を得ろうとして送り込まれた輩だ」

「……」

顎を上げ、視線を上に向ける。

目を細めて、

「家族と呼べたのはホントに数人だけだったよ」

「……そうか」

「……お前の家族は？」

「俺は……」

思い返してみる。自分の家族なんてのは。

「血の繋がって無い親父が一人いただけだよ」

本当の両親のことはもう覚えていない。

「どんな親だった？」

「ダメ人間。その一言に尽きるな」

炊事洗濯片付けは全くできず、常にたばこを吸い続け、服装はだらしなく、金の管理も
適当なうえに、酒癖も悪かった。
ただ、

「バカみたいに強かった。結局一度も勝てずに死んじまったよ」

「……そうか」

沈黙が下りる。
……やれやれ。
家族の話はタブーだ。
気まずさを紛らわすため缶コーヒーをすする。

「なぁ」

「ん」

「学校は楽しいのか？」

「さあな」

「……そうか」

「ただ――」

「ただ……？」

「悪くない」

・・・・・・

昼過ぎ、学校を出たリーシャは『ルイーナ』にいた。

「……」

「どうしたんだい？　リーシャちゃん」

目の前にボロネーゼランチ（五〇〇）が置かれる。
だが、それを前にしてもリーシャの顔は晴れない。

「なぁ……」

カウンターの向こうにいるライアスに問う。

「ん？」

「……クロサキたちはいつから学校に通っている？」

「んー、駆は五年前で、カンナちゃんは四年前かな。駆はそれまで世界中旅してて、カンナちゃんは入学した駆の追っかけだったね」

「……そうか。なら……」

再び問う。

「ん？」

「アイツはいつからだ？」

「あいつって？」

決まっている。

「『特異点』」

一息。

「『特異点』――雪村沙姫だ」

その言葉に。
その名前に。
ライアスは笑みを濃くする。

「『特異点』。初めから至っている人外、だね」

「……生まれた時からとある一点にのみ特化し、その一点のみにおいてはあらゆるもの凌駕する存在と聞いている」

「そうだね。その通りだよ」

「『神聖教会』からすれば文字通り神の子、『騎士団』からすれば生まれながらの王だ。
喉から手が出るほど欲しい存在であり……」

「『魔術学会』――つまり僕たち魔術師の天敵でもある」

「その雪村沙姫は。黒崎駆という守護者に守られているアレは、いつから『一般人』なんだ？」

「初めからだよ」

青年の笑みは止まらない。

「彼女は生まれた時からずっと『一般人』だよ」

「……！」

リーシャの目が大きく開かれた。

ありえない、と。

「『特異点』というのは十代になるころには何かしら能力の発露があるはずだ！　それをコントロールしなければ死ぬ。それを避けるためには『一般人』でいられるはずがないだろう！」

時には物理法則すら捻じ曲げる力だ。コントロール出来なければ体が耐えられなくなる。

故にある程度、力の使い方を学ぶ必要があるのだ。

「そうだね。でも、彼女は特別らしいよ」

「……どういう意味だ」

「僕にもよくわからない」

ただ。

「彼女が『特異点』として確認されたのは五年と少し前。ちょうど流(ながれ)さん……駆の養父さんが死んだ時期だったんだけど」

「……」

「それ以来、『特異点』の反応が出たり出なかったりしてるらしいよ」

「どう、いう意味だ……？」

「わからないよ。わからないからこそ、彼女は狙われていて、駆は彼女を守り続けている」

初めて、ライアスの顔から笑みが消えた。
目を伏せ、

「報われないかもしれない戦いを戦い続けているんだ」

激動

「なーんもでねぇな」

夜の明成市のビル街。
基本的に明成市の会社はかつての地震の際に率先して復興に参加した企業ばかりだ。
それゆえにそこそこ田舎だった明成市にも高層ビルいくつかある。
しかし、本来なら深夜までも光を放つ光は無い。夜の八時という時間にも関わらず。
それは高層ビルだけではない。小さいビルやマンション、飲食店にも光は無く、車すらない。
位相空間。
任意の範囲の空間の座標を意図的にほんのわずかにずらす。
そして、ずれて生まれた空間には動物は存在せず建造物や植物のみが残り、生物は展開時の設定によって変わるが基本的には魔力保有者だ。
現在、駆が展開している空間の場合も少しいじってあるが、基本的なものだ。
人のいない光景をビジネスマンションの屋上。

「さすがにおかしいな」

「ああ、なんというか、アレだ。日本で言う……嵐の前のシークア

ーサー？」

「“嵐の前の静けさ”な……」

「いやでも、頼りになりそうだな……」

確かに。
残念日本語は置いといて。
……確かに何も無さ過ぎる。
二週間も探しても全く音沙汰なし。

「どこにいんのかねぇ」

「それがわかったらここでくすぶっていないだろう」

「だよなぁ」

カンナのぼやきも理解できる。
正直言えばお手上げだった。
いままで雪村沙姫を狙ってくる連中もいろいろ面倒な仕掛けをしてきたが、二週間以上潜伏し、何もしてこなかったという試しはない。
……何が目的だ……？

いまいち意図が読めない。
だが、このままビルの上にいても仕方ない。
「カンナ、リーシャ、一度上がろう。」
帰ってきた反応には差があった。
「もうちょっと探索続けようぜ」
「そうだな、このまま続けても非効率だ」
「……」
カンナの答えに少しだけ驚く。
「……どうした？　珍しいなカンナ。こういう探索は嫌いだろに」
「え、いや、もし、こういう気を抜いたときに来るんじゃないかって……」
「まぁ、一理あるけどな」

……どうするかな。
顎に手を当て、考えようとして、

「なら、いい考えがある」

「何？」

「私も一度『ルイーナ』まで戻ってあの合法ロリに会いたくは無いからな、間を取って――」

「間を取って――？」

リーシャは得意げに笑い、

「私の部屋に行こう」

・・・・・・・・

数分後。
先ほどのビルから少し離れたビジネスマンション。
地上七階のエレベーターの中に三人はいた。

「結構いいとこに泊ってんだな」

「まあな。『教会』から依頼を受けた時に結構な額の支度金をもらったからな」

扉の前にリーシャとカンナ。駆は腕組をして後ろの壁に背中を預けている。

「そういや、追いかるのに世界中回ってたらしいじゃん」

「ああ、ヤツもいろいろな国を迂回して日本に入ったからな。私もいろいろ回ったものだ」

「なら、そのいろんな所で結構な額の金で遊んでないよな」

「……」

「……」

ちーん、と音が鳴った。

「ほら、着いたぞ。エレベーターから近いんだ」

「いや、ちょっと待てよ！」

何もなかったようにリーシャはエレベーターを出て、カンナがそれを追う。

「何だ」

「え、何？もしかしてお前、追いかけるとか言って、遊んでたのかよ！」

「そんなわけないだろう」

「だ、だよな。いくらなんでも――」

「せいぜいB級グルメの食べ歩きをしたくらいだ」

「満喫してんじゃねぇか！」

歩きながらも騒ぎ合う女子二人を見て、

「……仲いいなお前ら」

駆が呟いたのは聞こえなかった。

・・・・・・

そして。
リーシャとカンナは騒ぎながら。
駆は二人を眺めながら。
リーシャの部屋の前まで着いて。
扉を、開けた。
開けてしまった。

・・・・・・

すべては一瞬の連続だった。

「……？」

リーシャが扉を開けた瞬間に感じたのは二つの熱だった。
一つは開かれた扉の室内からのやけに高い気温。
もう一つは。
……は、え、て？
体温だった。正確に言うならば後ろに居たはずの黒崎駆腕の体温。
それがリーシャの腰に回されている。
それら意味は理解できずとも認識した次の瞬間。

「！？」

周りの大気が室内に吸い込まれ、それに抵抗するかのように駆がリーシャの腰を、そしておそらく自分の横に居たはずのカンナも掴んで走り出した。

「な、何を……？」

「お、おい駆……！？」

「黙ってろ！」

次の瞬間、リーシャは紅蓮の花を見た。

「！！」

炎だ。リーシャが滞在していた部屋から炎が吐きだされる。
先ほど感じた高い気温の意味を理解する。
同時に駆が走りだした意味も。
駆はリーシャとカンナを抱えたまま走る。が、突如として現れた炎はすぐそこまで迫っている。
……私たちが重りに……。
自分とカンナを抱えているせいで駆のスピードが制限されている。出来るのなら自らの足で走りたいが、自分は肉体面においては一般人とさほど変わらない。

魔術を使えば別だが、彼女の魔術は自分の肉体に行使するとなれば時間が掛る。
未だ、詳細な能力がわからないカンナも駆が抱えているからにはそれほど速く走れないのだろう。
それでも。
そんなリーシャの思考は杞憂だった。

「身体（フィジカル）、強化（エンチャント）。脚部（レッグ）、付与（フォース）……！」

引き金の言霊（トリガーヴォイス）。
それと共に駆の両足からの魔力が宿る。
黒の魔力光を弾かせながら加速し、炎を引き離す。
ほんの一瞬で非常階段の扉に近づく。近づき、強化された脚で蹴りを放つ。
交通事故のような音を立てながら、扉が吹き飛んだ。
蹴り脚でそのまま外に出て、

「……チッ」

「な……」

舌打ち共にリーシャとカンナは、

「ちょ……」

地上七階から放り投げられた。
奇妙な浮遊感が体を体が包む。
リーシャは空中移動に関するスキルはない。
というより彼女の魔術では出来ない。
瞬間的な強化は不得手で。
空中移動は不可能なのだ。
手足を無様にバタつかせているも恐らく同様だろう。
それを横目に確認した瞬間、轟音がした。
非常階段の入り口で二人を投げた姿勢から回復していない駆の後ろ。
炎が迫っていた。

「クロサキ……！」

「駆……！」

声が重なった。
それに答えるように、駆が飛び出しそのままリーシャとカンナをキャッチ。
背後の炎から二人を庇いながら駆は、
……！？
空中を、蹴った。
紙袋が破裂したような乾いた音が鳴る。
同時に前方から強い負荷を受ける。
思わずうめき声が漏れ、何とか確認した視界は夜闇に沈む街並みが後方に流れている。

移動しているのだ。
……空間跳躍！？
高速移動に関するスキルの中では高位に分類されるスキルだ。
……こいつ、やはり魔術師では無いな！
主に騎士や拳士が使用するスキルでもある。
魔術師が使えるものではない。
破裂音は連続する。七度目で、

「見つけた」

向きが変わった。
再び数度の破裂音が響く。向かう先はビルの屋上だ。
強烈な負荷の中で目視したそこには。

「……！？　あれは！」

駆が着地し、

「カケル！　あいつが……！」

リーシャの言葉よりも早く抱えていた二人を落として飛び出す。
その先には一人の青年がいた。学者のような服装だが、身だしなみ自体はだらしない。藍色の髪は無造作に伸ばされている。
リーシャがこの街に来る前から何度か遭遇し、駆とカンナは二週

間程前に写真で見た男。

「ハイア・セルテス・ガードナだ！」

その言葉に後押しされるように駆が走る。
駆の両手に何もない。
双刃銃を具現化する暇も惜しいとばかりに徒手空拳で行く。
目の前の青年はポケットに手を入れたまま動かない。
ただ、こちらを見つめるだけだ。
駆の右手が黒の魔力に包まれる。
同時にリーシャの視界の中、駆の膝が今までよりも深く沈んだ。
次の瞬間には駆は青年に目前にいる。
……舜動術（クイック・ムーヴ）！
空中移動の基礎となる移動スキルだ。
駆は青年の目前で拳を振りかぶり、

「『影の乙女は主を守らん』」

ぶち込んだ。

・・・・・・

……どうだ！？
カンナは駆が拳を叩きこむのを確かに見た。
駆は素手でもかなり強い。
カンナの脳裏にかつて入学直後の部活勧誘の時に駆が空手（ホモ）部部長を殴り飛ばした姿がよぎる。
その拳に魔力が追加されている。そんなものを喰らえばかなりのダメージを受ける。
が。

「くだらん」

未だポケットに手を突っこんだままの青年――ハイア・セルテス・ガードナは何のダメージもなかった。

「そんな見え見えの攻撃が通じるとでも？」

突き出された駆の拳がハイアの胸の数センチ手前で止まっている。
……黒い板……？
拳が黒い板のようなものに受け止められている。

「操影術……！」

リーシャが苦々しげに呟く。

「くだらん」

ハイアが右手を掲げた。

「駆！」

「攻撃とはこういう風にやるべきだ」

ハイアの背後、そこからいくつかの影の帯が飛び出した
否、帯ではなく槍だ。影の槍。
それらは駆へと降り注ぐ。

「……っ」

後ろに大きく跳ぶ。が、影槍は軌道を変えて駆を追う。
……追跡（ホーミング）かよ！
数本の影槍が駆に追いつくが、黒の魔力を纏った拳でたたき落とされる。
さらに自分たちの所まで駆が跳ぶがそれでもまだ追ってくる。

駆の顔が歪んでいる。
……駆！
懐から棒状の鉄を取り出す。

「錬鉄……」

「『K（カ……）』

リーシャもカードを指に挟み投擲する体勢だ。
だが。

「動くな！」

駆が二人を庇うように、左手を突きだす。
突き出された手のひらから生まれた銀色の魔法陣が影槍を受け止める。
ようやく影槍が止まった。夜の闇に溶けてゆく。
駆とハイドの手が下がる。
駆に庇われた。
その事にカンナは唇をかみしめる。
……くそ。
場違いな悔しさが胸に広がる。
……まだ、足りないのかよ。

「ふむ」

初めて、ハイドが興味を持った声で口を開いた。

「見たところ貴様の魔力光、肉体強化などの強化魔術は黒、防御や補助魔術は銀で使い分けているのか？いや、双刃銃自体は左右で色が違うだけで変わりが無かった。どうなっている……？」

俯き、ぶつぶつ呟き、口元を歪めながら顔を上げ、

「興味深い」

……なんだ、こいつ？

仮にも戦闘中だ。

カンナもリーシャも駆でさえも怪訝な顔で見つめる。

「ん？ああ、悪いな。これでも学者だからな」

理由になって無い理由を語り、

「ハイア・セルテス・ガードナだ。趣味は読書と研究嫌いなものは

肉、特技は楽器演奏に暗記だ。使用術式は操影術、所属は現在無し」

ちなみに

「目的は――特異点の抹殺だ」

「！？」

ばっさりと言った。

「どういう、つもりだ……お前」

「別に。それにその魔術師がいるのなら私の事は大体知っているのだろう？　というより私がこう言うことを分かっていてこの二週間ほど探し回っていたんだろう？」

まったくもって、うっとうしい。

「おかけで、術式の準備が手間取ってしまった」

「何……？」

「バカな！二週間探し回ったがなんの気配もなかったぞ！」

「当然だろう、気付かれないように仕掛けたんだからな」

「ぬ……」

言いくるめられたリーシャを庇うように駆が一歩前に出る。

「おい、一つ……聞かせろ」

「なんだ？　お前たちに気付かれずに仕掛けた方法か？それとも何を仕掛けたか……」

「もう……仕掛け、終わったのか？」

「……ほう」

驚いたように目を細めるハイア。

「ククク、それを聞くか。大した精神だ。普通なら何が仕掛けられているかが気になるだろうに」

「……答えろ」

「もう終わったよ、貴様らの学園に仕掛けた。」

「……！」

……そんな！

ハイアは懐から懐中時計を取り出し、

「夜明けに発動するように仕掛けてあるから……うむ。あと十時間ほどだな」

「おい……」

「どうした？　ああ、そうだな。術式の内容なら『矛盾の螺旋』を元にしたものだ。対象を虚数空間に放り込み『何もないはずの所に何かがある』という事象の矛盾によって崩壊を引き起こさせるものだ。今回は範囲と持続時間を広げているのだが……」

「待て！　どういうつもりだ……！」

リーシャの叫びと飛ぶ。

「なぜそこまで詳細に話す！？　どういうつもりだ貴様！」

「別に。貴様たちではもうどうしようもない」

「何……？」

「魔術師の小娘などいまさらだ。そっちの『奇跡求める悪魔（デウス・エクス・マキナ）』の連れもどうとでもなる」

「……俺の、事もどう、とでもなる……と？」

駆の問いも、

「ああ。今の貴様なら、な」

「……っつ」

「駆……？」

「なぁ、そこの二人。先ほどの炎はいわゆるバックドラフトというヤツだ、中々の火力だったろう？」

「それが、なんだと言うんだ……？」

「わからんか？」

ハイアの足元の影が揺らぐ。

「そんな炎からお前ら二人を庇って」

無事で済むと思ったのか？

言葉と共にハイアの身体が沈み、リーシャとカンナが追おうとして、

どさり、と音がした。

「……カケル！？」

「……駆！？」

黒崎駆が倒れた音だった。
息が荒く、額には脂汗が浮かびその背には、

「火傷か……！？」

おそらく非常階段の時に受けたもの。
そしてそれは、
……私たちを庇って。

「くそっ……」

悔しさと情けなさに拳を、

「くそっ……！」

地面に叩きつけた。

記憶

目が覚めた。

「あ……」

自室だった。
布団が掛けられ、ベッドに横たわっていた。
駆が一人で住んでいる一軒家だった。
あまり物が無い、わけではない。
本棚には漫画から医学書まで多岐にわたる。
机には最新型のパソコンがある。
エアコンは温かい風を送り、部屋を暖めている。
クローゼットには制服に、どれも同じような私服がある。
何時だった宋真とライアスが壁に張っていたポスターは意識から外す。
周囲を確認し、自分の身体に意識を向けた所で、

「ぐっ……！」

背中に痛みが奔った。
顎を引いて、体に掛っている布団をどかし自分の身体を見降ろす。
駆が下半身はズボンを穿いているが、上半身は服を着てなかった。

服は着ていなかったが包帯が上半身を覆っていた。
しかも包帯の表面には治癒魔術の術式が刻印されていた。

「……！」

そこで、思い出した。
……そうだ、俺は……。
爆発を起こしたビジネスホテルからリーシャとカンナを庇いながら飛び出し、その際に背中に火傷を負い、そのうえでハイド・セルテス・ガードナと交戦した。
そして、
……ぶっ倒れたんだな。
奥歯を噛みしめる。

「無様だな……」

呟き、起き上がる。
シャツを着て、立ち上がろうとし、

「何をしている」

「リーシャか……」

扉からリーシャが来た。

「どれくらい眠っていた？」

「六時間ほどだ」

つまり、ハイアの術式発動まであと三時間。

「カンナは？」

「『ルイーナ』だ。必要なモノがあると言っていた」

「そうか……」

ジャケットを羽織ろうとして、

「なぜだ……？」

腕を掴まれた。

「……リーシャ？」

「……お前はなぜそんなにまでなって戦う？」

「それは……アイツを守るために……」

「それは！　雪村沙姫に戦う理由を押しつけているだけだろう！？」

彼女の目に涙があった。
それを見て戸惑うと同時に駆は優しいな、と思う。
この少女は自分のために泣いている。
駆たちが生きている世界は死と隣合わせだ。
刹那の油断が終わりを呼び、
かすかな運の差が死を告げる。
そんな世界で信じられるのは己と一握りの仲間のみだ。
それなのに、
それなのに彼女は出会って数週間の自分のために泣いている。
嬉しかった。
自分のために泣いてくれて。
自分と真っ向から向き合ってくれて。
嬉しくてたまらなかった。
それでも、
それでも行かなければならない。
誰でもない自分自身のために。

「……違うんだよ」

「クロサキ……？」

「押しつけなんかじゃない」

なぜなら、

「俺が戦うのは自分自身のためなんだよ」

な、とリーシャの口から声が漏れる。

「俺にはさ、あの日の約束しかないんだよ」

十年前あの日の約束。
心の支えだった。
五年前養父が死んだ時からは、全てだった。
養父は思うように生きろ、と言った。
わからなかった。
何が自分の意志なのか。
それを見つけるためにこの街に来たのだ。

「だから、それを果たしたくて、あいつに――」

雪村沙姫に会いたくて。
この街に来た。
でも。

「あいつは『特異点』だった。あいつの力を狙う奴らがいた」

偶然に。
本当に偶然に『教会』特異点捕獲チームと鉢合わせした。
そして、戦った。
沙姫を守りたい一心――では無かった。

「怖かったんだ。沙姫がいなくなってあの約束が無くなってしまうことが」

もし、あの約束が無くなってしまったら。
黒崎駆は黒崎駆ではいられない。
なぜなら、

「俺にとってあの約束が全てだからな」

自分にとっては珍しく、僅かに、笑みがこぼれた。

苦笑といえるものだが、
……ああ、俺はまだ笑っていられる。

「他者依存じゃなくて自己満足なんだよ、リーシャ」

彼女の琥珀の瞳を見つめる。
涙に濡れたその目を。

「きっと、俺は勝手に戦い続けて、勝手にどこかで死ぬんだろうな。
何時叶えられるかも
わからない約束を胸に抱きながら」

だから、その時までは。

「止まれないんだよ、」

駆はリーシャを見つめ、リーシャは駆を見つめる。

「馬鹿だろう、貴様は」

「ああ」

「ナガミツよりも愚かだ」

「ああ」

「どれだけ傷つけられればいいかの分かっているのか」

「ああ」

「どれだけ傷つければいいのかわかっているのか」

「ああ」

「どれだけ苦しめばいいのか分かっているのか」

「ああ」

「もしかしたら――」

「……」

「もしかしたら、報われないかもしれないんだぞ……？」

「ああ――分かってる」

その答えに、リーシャは唇をかみしめる。

「……っ、お前はそれほどまでに雪村沙姫のことが――」

「違う」

即答に琥珀の目が一杯に開かれた。

「そんなんじゃないんだよ――そんなんじゃ、ない」

駆の拒絶するような言葉に沈黙が下りた。
そして、駆がリーシャを通り過ぎ、

「俺はもう行く、お前はここで待っていれば……」

「私も行く」

リーシャがこちらに振り返る。瞳は未だ濡れているが、涙は無く。

「そして、見届けてやる。貴様がどんな道を進むのかを」

不敵に笑った。

・・・・・・・

玄関の扉を開けた。
扉の外の右手には少し広めの庭があり、左手には倉庫がある。
そして、正面。道路と家の敷地を分ける門があり、そこには。

「お、来たのか」

腕組みをしているカンナがいた。
彼女は朱色のサムライポニーを揺らしながら、

「もう少し遅かったら先に行こうと思ってたぜ」

「そんなに前からいたのか？」

「いや、今来たところだ」

「待つ気ないだろ」

「必要もないじゃん」

「……」

にしし、とカンナは笑い。
はぁ、と駆はため息をつく。

「駆なら、絶対動くと思ったからな。一回、『ルイーナ』に行っていろいろ取ってきたんだぜ。それから、ハイアの野郎がどこにいるか分かったぜ」

「本当か……？」

「ああ。ライアスが教えてくれた。サービスだってさ」

「どこだ？」

「教会だ、学校の隣の山の上の方にあるアレだよ。ここ何年かは誰も出入りしてないらしいけどな」

「あれか……」

数年前に管理者がいなくなって、使われなくなった教会だ。
あそこならば誰も近づかないだろう。

「……悪いな、付き合わせて」

「何言ってんだよ」
カンナは少し尖った八重歯がある笑みを浮かべ、

「アタシが自分から駆に付き合ってるんだぜ？」

「――そうか」

ならば、彼女に言うべき言葉は謝罪ではなく、

「ありがとな、カンナ」

「……」

「……？　どうした、カンナ」

カンナは駆の言葉に目を丸くし、その上で頬を赤く染めながら、

「い、いや。なんか改まって言われると照れるな」

「……？」

おほん。

リーシャのわざとらしい咳。

「ほら、とっと行くぞ。夜明けまでそう時間は無いだろう」

「わかってるさ」

前を向き、もう一度リーシャとカンナを見て。

「行こう、頼むぜ。リーシャ、カンナ」

「おう」

カンナはにしし、と笑い。

「ふん」

リーシャはそっぽを向いて答えた。
それらを見届けて駆は脚を踏み出した。
が、

「おい、どこに行くつもりだ？　時間がないんだぞ」

駆は外に行かず、左の倉庫に向かった。

「時間が無いからこそ、だ」

正面のシャッターに手を掛ける。

「全速で走っても時間が掛る、だから山のふもとまではコイツで行く」

「コイツ……？」

「そう、コイツ」

音を立ててシャッターが開く。
その中にあるのは、

「ちょっとした、自慢だぜ」

大型の単車とそれの横にあるサイドカーだった。

・・・・・・

疾走

「きゃーーーーーーー！！」

まだ暗い町に三つの音が響く。
そのうち二つの音は悲鳴とエンジン音だ。
二つの音の発信源はサイドカー付きの単車、そしてそれを駆る一人の少年と二人の少女だ。

「耳元で叫ぶな！　ナガミツ！」

サイドカーに乗る褐色の肌に灰色の髪の少女、リーシャ・ルーンフアミリアが叫ぶ。

「だっ、だってむちゃくちゃスピード出てるだろ！　今！」

リーシャの後ろにいて、悲鳴を上げる朱色の髪に長身の少女、長光カンナが目に涙を浮かべながら叫び返す。
それに単車の運転手、黒崎駆が答える。

「だいたい時速百二十キロくらいだな。――問題ない。」

「ある！　あるから！　この道、制限時速四十キロだから！　三倍！　三倍のスピード出してるって！」

カンナの叫びは、しかし、

「リーシャ、夜明けまでどのくらいだ？」

「あと二時間四十五分時間だ」

「無視かーー！」

とりつくしまもない二人にカンナは後ろを指す。

「つーかあれ！後ろ見てみろ！」

カンナの指の先にあるのは町に響く音の最後の一つ。
赤く点滅するランプ。
黒と白にカラーリングされた車とバイク。
それに乗る青い制服の屈強な男たち。
そして、それから響くサイレン音と停止の呼びかけ。
つまり――――警察だった。

それもドキュメンタリーに出てくるような。

「ハイア捕まえる前に私たちが捕まるぞ！」

「だから、問題ないって言ってるだろう」

「問題ばっかだ！　ていうか、免許はどうした！」

財布が投げ渡される。
駆が長年愛用しているモノで、その中には、

「て、免許証じゃん！　しかも二十歳扱い！」

「知ってるかカンナ、意外にそういうのは簡単に作れるんだぜ」

「法律違反だーー！」

「うるさい、ナガミツ！　カケル、とっと位相空間に入るぞ！」

「ああ、頼む」

リーシャが指に挟まれたカードを掲げ、小さく呟いた瞬間。
世界がズレた。
位相空間に入ったのだ。
後方にいた警察は消えた。
同時に、車体もドリフトしながら止まった。

「おいおい」

代わりに。

「ガァァ……！」

前方に獣がいた。
全長三、四メートルはあろうという狼を模した巨体。
爪と牙は大きく、黒ずんだ体毛からは影がにじんでいる。
明らかに異常発達した筋肉。

「コイツは……」

おそらく高位の魔獣種。

「野生のが捕まえられて、ドーピングされてるな」

「どうする？　まともに相手すると面倒だ」

「掴まってろ」

「は？」

エンジン音が鳴り響く

「ガァァアアアアアアアアアーーーーー！」

真狼の咆哮と共に単車を発進させた。

・・・・・・

速度メーターが時速百五十キロを越えた。
そのスピードのなか体を右に傾けて、右折する。
一瞬前までに走り抜けた所に爪が振り抜かれた。
背後でコンクリの瓦礫が宙を舞う。

「リーシャ！」

「ああ！」

指の間に挟まれた二枚のカードを投擲する。
それらは走る狂う魔狼に突き刺さり、

「『K（カノ）！』」

爆発した。
ルーン魔術。
ルーン魔術とは北欧で使われていた力ある文字を用いた魔術だ。
ルーン文字自体は祈祷式の象徴などで使われる場合があるが、ルーンに秘められた力を使う魔術師はほとんどいない。
リーシャの使うルーン魔術は非常に難解なルーン文字をローマ字に対応させたものだ。
『K（カノ）』。

ルーン文字の『ケン』をローマ字の『K』につなげたもの。
その意味は松明の炎。
リーシャの叫びをもってその力は行使される。
が。

「くそ、効いていない！」

体毛と影が爆発時の炎と衝撃を防いでいるのだ。

「リーシャ！　もう少し持たせろ！」

魔狼が跳びかかってくる。

「何とかなるのか！？」

体を傾けて、左折する。
コンクリのつぶてが体に当たるが、

「なる！」

カンナが満面の笑みで答える。
魔狼が再び飛びかかってきた。

「何でお前が答える！」

ギリギリ右折し、魔狼を回避する。
鼻先で爆発させ、僅かにひるませる。

「決まってるだろ！」

右折した先は広め一本道。目的地の教会のふもとまでは一直線だ。
駆がアクセルを振りしぼる。
加速し、魔狼を引き離す。
カンナがサイドカーで立ち上がる。

「アタシが何とかするからだ！」

ツナギのポケットからあるものを取り出す。
鉄の延べ棒だ。
カンナそれを手にし、

「錬鉄、製剣……！」

両手から延べ棒――玉鋼に朱色の光が伝わる。

光が玉鋼を包みこみ、変形する。

「一騎刀閃……！」

カンナが手に握るのは柄が長い朱色の剣だ。
長さは二メートル弱。柄が三分の二を占め、剣というよりも槍だ。
それを握りしめ、狭いサイドカーの中でできるだけ脚を広げる。
リーシャが狭そうにするが気にしない。
思い切り振りかぶり、

「おんどりゃぁぁぁぁぁ……！」

乙女としてはあるまじき気合いの声と共にぶん投げた。
投げられたと同時に音速を越え、乾いた破裂音が響く。
超高速で飛ぶそれは魔狼の右の肩に突き刺さる。

「ギャァァァーーーーーー！」

体勢が崩れ転んだ。土煙りが舞う。
その間に直線路も抜け、

「止まるぞ！」

ブレーキ。
甲高い音が響き、車体が大きく横滑りしながら止まる。

「やったか！？」

「やったぜ！」

カンナがガッツポーズをしながら声を上げ、

「グァァァァアアア！」

魔狼は土煙りを振りはらい、右の前足を引きずりながらも来た。

「やってないではないか！」

「あ、あら？」

カンナが首を傾げながら、頬をかく。
さらに魔狼の傷。
それが、影がまとわりつき治っていく。

「厄介だな」

「自動修復……いや、破損した肉体を影で補修しているのか……」

「どうすんだ」

「簡単だ」

単車から降り、両手に黒銀の光が集まる。
現れた双刃銃を握りしめ、

「補修のしようがないくらいのダメージを与えればいい」

「なるほど」

カンナがサムライポニーを揺らしながら笑う。
サイドカーから降りて、両手の指の間に鉄の棒を挟む。
リーシャもカードを指に挟む。

「行くぞ」

駆が一歩踏み出そうとし、

「ああ、行って来い」

「さっさと行け」

二人が先に前に出た。

「な、おい！？」

驚く駆に背を見せ、

「時間あんまりないだろ？」

「すぐに追いつく」

「だが」

「駆」

カンナが顔だけ振りかえる。

「任せてくれ」

「……！」

そして。駆もカンナとリーシャに背中を見せる。
脚に魔力を通し、強化する。

「カンナ、リーシャ――」

膝を沈め、

「任せたぞ」

跳んだ。

「おう！」

「ああ」

背に心地よい応えを聞きながら。

・・・・・・

「にしし」

にやけが止まらない。

「なんだ気持ち悪い」

「いやだって聞いたか？　“任せたぞ”、って」

……カッコいいな！　ちくしょう！

「やれやれ」

リーシャが首を振っている。
と。

「グルゥゥゥ……！」

魔狼が唸りを上げる。

「来るか」

「いいぜ、来いよ！　今のアタシはテンション最高だ！」

なにせあの駆が“任せる”と言ってくれたのだ。
初めてかもしれない。
初めて会った時から駆には頼ってばかりだった。
守られてばかりだったのだ。
だからこそ、今回の一件で一緒に戦えたのは嬉しかった。
普段も魔獣狩りなどはあくまでカンナの経験値稼ぎのようなもので、駆と肩を並べた事はない。

不謹慎かもしれないが嬉しくてたまらなかったのだ。
にやけ顔が止まらなくなるくらい。

「陰陽寮所属・ハ種・戦巫子、長光カンナ！」

「お前、巫女だったのか！？」

「いや、何でそんなに驚いてんだよ！　そこは一緒に名乗りを上げる所だろ！　あと陰陽寮所属になると女は皆何かしらの巫女なんだよ！」

「あ、いや、そうか」

おほん。

「『ルーンの家族（ルーンファミリア）』所属第十位、リーシャ・ルーンファミリア」
その名乗りに、

「アオォォォォォォォォォォォン……！」

魔狼も応えた。

・・・・・・・

「錬鉄、精製……！」

長光カンナは刀鍛冶兼超能力者だ。
それも、科学的に植え付けられた超能力ではなく天然のものだ。
自身の持つ異能を以って刀剣を精製する。
分子変換（マイクロトランス）に念動力（サイコキネシス）。
金属の分子構造を変換し、念動力で射出する。
鉄の棒で大剣を作り、円環状に配置し対象を囲むように剣の檻を作ったり。
精製した槍を投擲し、念動力で超加速させて音速を越える一撃を放ったり。

「山嵐！」

いくつもの剣を周囲に待機させ、弾丸のように放つこともできる。
数は二十四。
長さは一メートルほど。
それらは魔狼へ放たれる。
だが、

「ギャアァ！」

ほぼ命中するも、体毛と筋肉に弾かれる。
それでも僅かにひるみ、叫びを上げる。
その空いた口に。

「汚い口だな！　消毒してやろう！」

リーシャがカードを投げる。

「感謝しろ！」

口内で爆発する。

「……！」

爆発の衝撃で魔狼が唸りを上げる。
前足が上がった所で、

「もう一丁！」

大きく跳び上がったカンナがいる。
その手には大剣。

「おらぁあ！」

振りおろし、左の肩に突き刺す。
突き刺さり刀身が沈むが、
……浅いか！

「おわっ！」

魔狼が体を振り、カンナの身が投げだされる。
宙に浮き、カンナの身体が放物線を描いてリーシャまで飛んで、

「おっと」

「へぶっ」

リーシャが避けて、変な声を上げて潰れた。

「こういうときは確か……ご愁傷様、だったか？」

「ちげぇよ！　てか、受け止めろよ！」

「アア、スマンスマン、ワルカッタ」

「適当すぎる……！」

魔狼が爪を振ってきた。
左右に跳んで避ける。
見れば、突き刺したはず大剣が抜け落ちている。

「やっぱりあのサイズじゃダメか！」

「先ほどの槍は出来ないのか！？」

「ああいう大技は時間が掛るんだよ！　効かなかったしな！」

「威張るな！」

声を掛け合いながらも振られる爪を避ける。

小さいサイズの剣は通さないし、大剣は刺さっても効かない。
リーシャの爆発も体毛や筋肉に阻まれる。
先ほどの口内の爆発も効果が薄い。
倒しきるにはもっと強力な剣撃かもっと内部での爆破が必要なのだ。

「カンナ、お前の鉄貸せ！」

「ああ！？　なんで！」

「いいから早くしろ！」

「くそっ！特性の玉鋼なんだぞ！」

投げる。

「少し引きつけてくれ！」

リーシャが玉鋼を受け取る。

魔狼が牙を突きだそうとしたが、横からの剣弾に意識を削がれる。
リーシャは受け取った玉鋼に血で何かを書き込み、

「ソレをそのままにして、さっきの槍を作れ！」

受けとったソレを見れば、
……なるほど！

「ちゃんと引きつけろよ！」

「任せろ！」

後ろに下がり、魔狼はリーシャに任せ精製を始める。
朱槍の精製に掛るのは基本的に三十秒はかかる。
さらに先ほどから何度も力を使っているのでそれなりに消耗している。
カンナの能力は精神力を使っているので消耗すればするほど能力の制度が落ちる、
だが今のカンナは。

……テンションマックスだぜ！
思い出されるのは先ほどの駆の言葉。ついでに脳内ファイル内の駆のカッコいいシーンを思い出す。
玉鋼を包む光が強まった。
刃が生まれ、柄が伸びる。
強く握りしめ、光が弾けて、

「一騎刀閃……！」

精製に二十二秒。自己ベストの更新に笑みが浮かぶ。
振りかぶる。

「リーシャ！」

「！」

魔狼を引きつけていたリーシャが跳ぶ。
そして、

「行っけぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

投擲する。
乾いた破裂音を鳴らして飛び、左肩に突きささる。

が。

「ガァァァア！」

二メートル以上の朱槍がほとんど突き刺さってもまだ動いている。
それでも、リーシャとカンナの口元には笑みが浮かんでいる。

「ちゃんと意図を理解したか？」

「もちろん」

ならいい。
右手を掲げ、指を鳴らした。
そして、

「！？」

朱槍が爆砕した。
最後の叫びは短く。
爆炎と爆熱、爆風、さらに爆砕した朱槍の破片に体内から蹂躙され、
絶命する。
リーシャが玉鋼に書いたのは左向きの不等号のような記号。
オリジナルの炎のルーンだ。

それをカンナがルーン文字のみをいじらずに朱槍を精製する。

「『刻印槍・朱花火』ってとこか」

「痛い名前だな」

「うるせ、つーかグロいな。アレ」

体内からの攻撃は魔狼を絶命し得たが、亡骸はグチャグチャで焼け焦げている。

「放っておけ、さっさとカケルを追いかけるぞ」

「いや待てよ、さっきので大分疲れたんだけど……」

「私も同じだ。久しぶりにオリジナルの方を使ったからな……」

それでも、山へと足を向けようとする。

「そういえばさ」

「ん？」

「さっきどさくさにまぎれて、“カンナ”って呼んだよな？」

「……呼んだか？」

「いやいや、呼んだじゃん」

「いやいやナガミツ、何を言ってるんだナガミツ。私はナガミツの事を“カンナ”など呼んでないぞナガミツ」

「今呼んだじゃん」

「……何か文句あるのか」

「無いし、カンナでいいよ。仲良し女子だな」

「……ふん」

ニシシとカンナは笑い。

リーシャ鼻を鳴らした。

意思

山の中を駆け抜け、その先にあった扉を開ける。
荒れ果てた教会だった。
椅子の類は全て撤去され、装飾もほとんどない。
奥にひび割れたスタンドグラス、巨大な魔法陣が一つ。その下にハイア・セルテス・ガードナはいた。

「……この世界には様々な役割（クラス）があるがどうしても理解できない役（ク）割（ラス）がある。魔術師や聖職者や騎士ではない。大陸の武芸者や引きこもりの錬金術師や超能力者でもない」

こちらに背を向け語りだした。

「あらゆる勢力に屈服せず、服従せず、隷属しない。ただ己が信じ、護ると誓った存在に全てを懸ける愚か者。そういうバカがたまにでてくる」

駆はその背に向けて歩みを進める。

「そういうバカにありったけの軽蔑と畏怖を込めて。こう呼ぶ」
『守護者（ガーディアン）』、と。

「おまえは何を想い戦う？　黒崎駆」

振りかえった。
口元に笑みを浮かべている。

「驚いたな。当分は動けないと思っていたが」

「悪いが回復は早い方でな」

完治したわけではない。
今でも動けば痛みがある、
……それでも、だ。
戦えるのなら、戦う。
己の胸に信じる者があるのだから。

「そんなレベルの話ではないだろうに」

「どうでもいいだろう、そんな話」

両手に光が溢れる。黒と銀。
双刃銃『デウス・エクス・マキナ』。

養父である黒崎流から受け継いだ礼装だ。
黒の刃でハイアの魔法陣を指す。

「それが術式の核か」

「ああ、そうだ。もっとも陣自体は……」

「学園の地下、だろ？」

ハイアの目が大きく開かれる。

「ほう、気付いていたのか……」

「俺が使える探索系の術式は基本的な半円での探索だ。盲点だったよ、まさか地上への探索を避けるために術式を地下に描くなんてな」

見つからないわけだ。

「言うほど簡単ではないがな。地道に学園の地下に影の帯を通して陣を作った。お前たちのおかげで予想以上に時間が掛ってしまったしな」

「知るか。……それで、発動と同時に陣を浮上させたら、校舎は一瞬で飲み込まれるだろうな」

「それだけではない。予定では五、六時間ほど術式を展開したままにするから登校してきた生徒も飲み込む。……『特異点』を含めてな」

地上スレスレで展開するから気付かれる心配もない。

「そうか……」

聞きたいことは聞いた。
後は。

「もういいのか？　望むならサルでも分かるように術式の説明もするが」

言い捨てる。

「勘違いするなよ」

「俺はお前と話し合い来たんじゃない。お前がアイツを殺そうとする限り、俺とお前がすることは一つ――殺し合うだけだ」

「……まるで、目的を諦めれば見逃すと聞こえるが」

「それなら死なない程度に痛めつけてリーシャに引き渡すだけだ」

ハイアが視線を提げた。
口を閉じ、駆も何も言わない。
そして。

「く、くくく」

ハイアの肩がふるえた。

「ははははは」

顎を上げて顔を上に向け、左手で顔を覆う。

「ははははっ……ふざけるな……！」

手を振り、感情をむき出しに叫んだ。
声を荒げて、激昂する。

「『特異点』などという存在を！　放っておけるか！」

駆は始めてみるハイアの取りみだす姿。

「そうか、やっぱりお前たち『魔術師』は……」

「ああ、そうだ！　認められるわけないだろう」

荒廃した教会に声が響く。

「認められるか！我々魔術師が何年、何十年もかけて尚、たどり着けない領域に初めから存在するなど！」

それは当り前の思いだ。

「私の父も！　祖父も！　多くの魔術師がその人生を費やし無駄にした！」

いつか、たどり着けると信じてその人生を費やした。

しかしその先にあるのは、挫折と絶望。

そして、

「才能などという壁に当たりその意思を否定する！」

それはつまり、

「分かるか！？　『特異点』などという存在は！　魔術師そのものを否定しているのだ！」

「――――――」

そう。

それが魔術協会において『特異点』が忌み嫌われている理由。

その思いを、

黒崎駆は――――、

「そうだな、俺はお前を否定できない。むしろ――――お前のほうが正しい」

「ならば……！」

「けど――――」

思い返す。
一番大事な思い出を。

「俺は沙姫を守る」

いつかの公園に彼女はいた。
ブランコに座ってうつむいて。

「たとえ、魔術協会や神聖教会、王国騎士団やそれ以外のありとあらゆる勢力――」

一人でいた少女に声をかけた。
寂しそうな彼女を笑わせたくて。

「世界そのものが沙姫の敵になったとしても」

一日遊んだけだった。
だから約束した。
いつかもう一度。

「もしそれが悪だって言うのなら俺は――――」

その約束を何時になったら叶えられるかは分からないけど。
ただ、彼女を守るために。

「悪魔にだってなると決めた！！」

『奇跡求める悪魔（デウス・エクス・マキナ）』

それは、二つ名でも呼び名でもただの武装の名でもない。
自分自身に誓った名だ。
たとえ目の前にどれだけ絶望（てき）が広がっていても、胸の中にたった一つの希望（やくそく）があるのなら、奇跡を掴んで見せると。
そう誓った。
「――――ならば、私は貴様を排除し、『特異点』を消す！」
ハイド・セルテ・ガレイシアの足元に魔方陣が浮かび、そこから影の槍が生まれ、駆を狙う。

それに駆は足を強化し、膝を沈めて、

「――――」

疾走する。

それと同時に、影の槍も射出される。

「！！」

悪魔と影使いがぶつかり合う。

・・・・・・・・・・・・

射出した影槍の数は三十四。

それらは高速を以って駆へと奔る。

避ける隙間などなく、数舜後には駆の体を貫く。

追尾性能を持つので回避するには激突の寸前で飛び越えるか、横

に行くしかない。
そのどちらかを駆が行ったのなら、そこに影槍を射出すれば終わりだ。
たとえそれを避けられても、さらなる影槍での波状攻撃をすればいい。
……私の勝ちは揺るがない……！
しかし、黒崎駆はハイドの思考を超えていた。
駆は飛び越えなければ、横にも行かなかった。
……なに！？
ただ――――加速した。
さらに影槍めがけて発砲。
放たれた黒銀の弾丸は四。
それらに砕かれた影槍も四。
残り三十。
たった四本減っただけだが、
……なぜ急所狙いだと解った！？
駆が撃ち砕いた四本の影槍はそれぞれ、頭、のど、心臓、胸の中央を狙っていた。
さらに激突の寸前に小さく呟く。

「刀身（ブレイド）、強化（フォース）」

刃を振り上げ、

「……シッ！」

ばつの字を描き、振りぬく。
その双閃は駆の胴体を狙う影槍のほぼすべてを破砕する。
後に残ったのは駆の腕や足を狙ったものが十二。
駆は刃を振った反動でさらに加速し、影槍の群れに飛び込んだ。
両腕を鳥のように広げる。
影槍が駆の腕や足を切り裂き、何本かが貫くが、

「――――」

顧みずに、体を回した。

「！！」

駆の体を軸に刃と腕が風車のように回り、影槍を残らず断ち切る。
そのまま直進し向かった先には、自分がいる。

「『影の乙女は……！」

「――――遅い」

漆黒の刃が己の胸を斜めに切り裂いた。

・・・・・・・・・・・・・・・

……まだだ……！

止まらない。

黒の刃が振りぬかれた直後、銀の刃を突き出す。

それは、ハイドの肉を貫く前に、

「――――主を守らん『！』」

影の障壁に阻まれる。

刃と盾が拮抗して甲高い音が響く。

わずかに動きが止まるが、

「おお……！」

次の瞬間、刃を振った。
黒の刃を振りぬき、銀の刃を突き出す。
銀の刃を振り上げ、黒の刃を引き戻す。
高速で、連続で、よどみなく、止まらない。
斬撃の数が一瞬で三十を越え、四十を過ぎ、五十を迎える頃にはひびが入り、白銀の一突きをもって破砕する。
すぐに銀の刃を引き戻し、黒の刃を振り上げるが、止められた。

「『影の楔は彼を仕留めん』……！」

杭だ。
高速射出された長さ五十センチほどの影の杭。
それが、振りぬこうとされた刃にぶち当たりはじかれた。
見れば、ハイドの位置が先ほど障壁を展開した所より後ろにいる。

「……行け！」

さらに影の杭を五本射出しながら。
……撃ち落す……！
そうした。
五発の弾丸が吐き出され、杭にぶつかり、

「！！」

かき消される。

「これは……？」

「一本につき影槍五本分だ！！　それなら消せまい！！」

いままで撃っていた弾丸では確かに消せなかった。
ならば、
……弾を換えればいい？

「弾丸（バレット）、換装（コンバート）。貫通弾（スピア）！」

再び放たれたのはそれまでとは異なる弾丸だ。
今までの弾丸よりもより鋭い。
それらは再び影の杭にぶつかり、

「！」

まさしく、投槍のごとく。

貫いた。

「な……！」

『弾丸換装（コンバートバレット）』

駆の魔力で構成された弾丸。
それを瞬間的に駆の望む性質に換装するスキルだ。
五発は五本を貫く。その事に再びハイドの動きが鈍り

「おお……！」

そのことを逃さぬとばかりに駆が走る。
彼我の距離を一瞬で詰める。
迫りくる影槍や杭は打ち落とし、ハイドの正面へ走る。
前蹴り。
右足の裏を相手に真っ直ぐ向けた蹴りを放つ。

「くっ……！」

それはハイドに当たる寸前に現れた影の盾に阻まれる。
着弾の衝撃に駆が顔をしかめた瞬間に影槍が生まれ、

「『閉じられし刃は影の檻なり』……！」

取り囲む様に駆へと卒倒する。

だが、

「と」

跳躍した。それは影の盾に接触したままの右足を使ったものだ。

前蹴りの衝撃を使い大きく跳躍し、宙返り。

影の刃は駆の髪を数本切る。

体を縦に回転させ、

「弾丸（バッレト）、換装（コンバート）。衝撃弾（バースト）」

今までの数倍の大きさの弾丸が左右一発ずつ吐きだされる。

轟音、着弾、そして。

「がぁっ……！」

影刃の破砕音と血混じりの呻きが響く。

同時に駆が着地。

ハイドと駆の距離が大きく空いた。

「なん、なんだ貴様は……」

ハイドが声を漏らす。
問い詰めるように。

「なんなんだ貴様は！！」

叫びと共に前に出た。

・・・・・・

戦闘の音が響く。
……貴様は……！
両手に影を纏わせ爪や剣として振り回す。
ハイドは慣れぬ体術を用いながら叫ぶ。

「貴様は、そこまでの力を持ちながら！」

大きく振りかぶった右手の影爪を振り下ろす。

下から撥ね上げられた黒の刃に砕かれた。

「女を守るだけだと！？」

のけ反る体を庇うように影槍を背後から射出する。
銀の弾丸により撃ち落とされた。

「それだけの力があればどこかの機関や組織に所属しようと思えば簡単なはずだ！」

左手に作りだした影の剣を突きだす。
振り下ろされた銀の刃に叩き折られる。

「なんなんだ、貴様は！何故そこまで愚直にもアレを守護する！」

我武者羅に突き出した影爪が駆の頬を浅く切り裂いた。
同時に脇に黒の刃が叩きこまれる。
ハイドは叫びに血を混じらせながらも、

「それほどまでにあの小娘の事が――」

「違う」

ハイドの言葉を拒絶するように駆が言葉を挟んだ。

「そんなんじゃない、お前も、リーシャも勘違いしすぎだ」

そんな綺麗なものじゃない。

「ただ、俺はそれしかない空っぽの存在なんだ」

かつての約束だけを胸に、と。

「お前の問いの答えは簡単だ――俺にはそれしかないからだ」

それだけだ、と駆は言う。

だから――。

「俺はここでお前を終わらす」

告げた。

「ふざっ……！」
……貴様は……！
後ろに大きく跳ぶ。
十五メートル以上も距離を空ける。

「ふざけるなぁぁぁ！」

ハイドの背後に魔法陣が浮かぶ。
直径二メートルもあるものだ。
影で描かれたそれは鈍い魔力の輝きを灯し、

「貴様は……！」

腕を駆へと掲げる。
さらに小さめの魔法陣が生まれ、背後の魔法陣から鈍い輝きを受け取り、

「なんなのだ、黒崎駆……！？」

影の濁流を吐きだした。
『術式（コード）・影喰らい（シャドウイーター）』。
学園に仕掛けられた術式の対人用だ。
影の濁流に触れたものを虚数空間に呑みこみ、存在を崩壊させる。

空間すら呑み込みながら、

「……！」

駆へと迫った。

・・・・・・

……なんなのか、か。

両手に握る『デウス・エクス・マキナ』に力を込める。

自らに迫りくるのは虚無の塊だ。

当たれば駆一人など消失する。

しかし、それを前にしても顔色を変えることは無い。

ただ、目を細め、

「言っただろう、ハイア・セルテス・ガードナ」

ありったけの魔力を『デウス・エクス・マキナ』に叩きこむ。

俺は――。

「――――ただの奇跡を求める空っぽの悪魔だ」

――――銃身（バレル）、解放（リリース）。第一段階（レベル１）。

呟いた瞬間、双刃銃から黒と銀の風が吹き荒れる。

「！？」

ハイドの顔が驚愕に歪む。

だが、そんな事は構わずに。

『欠け落ちる愚者の慟哭（クレセント・カノン）――――！！』

引き金を引いた。
左右の銃口から放たれたのは黒と銀、二条の光線だ。
それらは絡み合い、二色の砲撃となって往く。
激突。
影の濁流と黒銀の砲撃がぶつかり合う。
一瞬、拮抗し。

「！？」

破砕音と共に影の濁流が砕けた。
『欠け落ちる愚者の慟哭（クレセント・カノン）』。
その能力はハイドの『影喰らい（シャドウイーター）』と似て非なるものだ。
『影喰らい（シャドウイーター）』が触れた物質を呑みこむのに対し、
『欠け落ちる愚者の慟哭（クレセント・カノン）』は触れた物質を空間ごと砕く。
影の濁流が物質を呑みこむ前に存在している空間そのものを破砕するのだ。
だから黒銀の砲撃は影の濁流が存在する空間ごと破砕し、

「あ……」

爆音の下、一瞬にして、ハイド・セルテス・ガレイシアに激突した。

・・・・・・

立ちこもっていた土煙りが晴れる。

回復した視界の先には瓦礫の山に仰向きで倒れている。

かろうじて息はあるが、見るからに死にかけで、満身創痍だ。

駆はそれを確認し、歩み寄る。

彼我の距離二十メートル。

「は」

一歩踏み出した所でハイドが駆に目を合わせた。

「ははは」

笑い声を上げる。皮肉げな笑みを浮かべ、

「貴様のどこが空っぽなんだ」

彼我の距離十五メートル

「貴様はただ内包しているものが純粋過ぎて透明だから気付かないだけだ」

彼我の距離十メートル。

「笑わせる。貴様はただの理想主義者だ」

彼我の距離五メートル。

「一つ予言しておこう」

彼我の距離０メートル。
左の刃銃に魔力を込め、ハイドの左胸に照準を定める。

「いつか、貴様は己の内包した感情に気付くだろう」

通常弾一発分の魔力だが十分だ。
目の前の男を殺すには。
しかし、ハイドは笑みを濃くし、

「ああ――、それは実に見ものだろうな」

「うるさい」

引き金を、引いた。

真相

「どうした、駆？　そんな頭の痛そうな顔をして」

ハイア・セルテス・ガードナに関する一連の事件が終わってから二日。
十二月二十二日。
明成学園二学期最後の日だ。
登校してきた宋真に掛けられた言葉だった。
駆は机に肘を立て、手で頭を押さえている。

「実際に頭が痛いんだよ」

「風邪か？　珍しいな」

「いや、そうじゃなくてな」

「？」

首を傾げる宋真。
視線を前の席のカンナに向け、また首を傾げる。

「お前もか、長光」

「いろいろあるんだよ、すぐわかるから」

カンナも疲れたように机に突っ伏す。
二人の様子に首を傾げながらも、自分の席に着く。
そして、担任が入ってきた。

「よーし、お前ら席付けー」

担任教師、洛上登。
ポジティヴな名前だが、

「あー、いいかーお前ら。ダルイから一回しか言わないからよく聞けー」

ものすごくやる気なかった。
死んだ魚のような目でクラスを見渡し、

「このクラスに転校生が来ましたー、ハイ、拍手ー」

パチパチといい加減に手をたたく。
一拍おいて、

「え？」

クラスのほとんどの目が点になった。

「せんせー、今日二学期最後ですよねー」

「はい、そーです」

「せんせー、明日から冬休みですよねー」

「はい、そーです」

「せんせー、それなのに転校生ですかー？」

「はい、そーです」

洛上の言葉をかみ砕いて、理解して、

「ええー！？」

皆で叫んだ。

「うるせー！　しょーがないでしょ！　安心しろよ、お前らー！
キモいブス男でも、ムカつくイケメンでも、ダサい豚女子でもない
んだからー！　ハイ！　どうぞ、転校生さん、カモン！」

やけくそ叫びにより扉が開き、転校生が入る。
……はぁ。
溜息を吐く。
もうどうにでもなれ。
もはやどうしようもないのだ。
面倒事が増えたら宋真に押しつけよう。
入ってきたのは少女だった。
灰色の髪に褐色の肌。
鋭い琥珀の瞳。
豹のごときしなやかな少女。
彼女は黒板に不慣れな日本語を書きこむ。

「北欧から留学してきたリーシャ・ルーンファミリアだ」

宋真の視線がこちらに来ているのがわかる。

手で触れるなと応え、リーシャを見る。

「まぁ、とりあえず一日だけだが……」

彼女は笑みを浮かべ、

「よろしく頼む」

・・・・・・

午前中のみの終業式が終わった。

リーシャ・ルーンファミリアは階段を上っていた。

朝のホームルームでは質問攻めになり、さすがに辟易したが今一人きりだ。

……というか、カケルもカンナも助けてくれなかったな。

いつか仕返ししてやろう。

密かに決意を抱きつつも階段を上がる。

屋上へと続く階段だ。
とある人物に会うために駆たちと別れてここに来た。
もっともその人物がいる確証はないが、確信している。
階段を上がりきる。
正面の扉。鍵は掛っていなかった。
屋上への扉を空けた。
冷たい風が体にぶつかる。
それでも構わずに前に出て、

「こんにちは、リーシャちゃん」

「……ああ」

雪村沙姫に出逢った。

・・・・・・・

「ああ、そうだ。怪我とか大丈夫？　リーシャちゃん」

開口一番。
制服の下には確かに包帯が巻かれているし、未だ傷はあるものの。
冬服故の少ない肌の露出部分では傷は無い。

それなのに彼女は自分の怪我を知っている。
つまり。

「お前、知っているな？」

「何を、かな？」

「とぼけるなよ」

一息。

「あいつが……カケルがお前の事を守り続けている事をだ」

「――うん」

あっさり、と頷いた。
……こいつは……！

「カケルは、お前が気付いている事に……」

「気付いてると思うよ、駆くん鋭いしね」

呼び方が変わっている。
じわりと汗がにじむ。
……なんなんだ。
それは、奇しくも。
ハイア・セルテス・ガードナが黒崎駆への感情と同じだった。

「お前は何をしている……？」

「うん？」

「あいつは！お前のことを想ってずっと守り続けているのに！ありとあらゆる災厄からお前を守ろうとしているのに！お前は何をしてるんだ！」

「何も」

「お前……！」

思わずポケットに手が伸びる。

「ただ、待っているだけだよ」

手が、止まった。

「私からは駆くんに会えないよ」

沙姫は目を伏せ、悔むように、悲しむように話す。

「私はね。五年前に初めて会った時に駆くんとの『約束』を忘れていたんだよ」

「な……！」

「忘れてたっていうより、もう諦めてたのかな」

黒崎駆の根幹ともいえる約束。少年と少女が交わした雪の約束。
それを、当事者である雪村沙姫が諦めていたなんて。
そんなの。
……カケルが報われなさすぎる……！

「言い訳になるかもしれないけど、あの直後に地震があって。探したけれど見つからなくて。きっと死んじゃったんだなぁ、って思ってたんだよ」

五年もたって。

「駆くんが転校してきた時に『約束』を思い出したけど他人の空似だと思った。最もその後にいろいろあって思いだしたけどさ」

雪村沙姫は自分の身体を抱きしめるようにし、

「いまさら思い出したなんて言えないよ。いまさら会い直してなんて言えないよ。いまさら守ってくれてありがとうなんて言えないよ。いまさら……」

リーシャは息をのむ。

沙姫の泣きそうな顔を見て。この二週間近く遠くから見ていたが常に笑顔だった。

その彼女が、辛そうに、苦しそうに、儚そうに泣きそうな笑みを浮かべている。

「だから……私は何もしないし、何もできないよ。ただ――」

「……ただ？」

「駆くんの帰る場所になりたい」

・・・・・・

「今回は結構大変だったみたいだね」

差し出されたコーヒーカップを受け取り、一緒に貰ったメモはポケットへ。

放課後。どこかに行ったリーシャはほっといて、カンナは寮に帰った。

「……まぁな」

「てゆうか、結局あの小娘しばらくこっちに居る訳？」

「らしいね。彼女の『父』も了承済みらしいし」

他人事のように言っているがリーシャの転校に関してはこの青年が一枚かんでいる。

駆はライアスから出されたコーヒーを飲んでいた。

……缶じゃないのは久しぶりだな。

市販には無い香りが漂う。

「まったく、面倒なのがまた増えたわね」

「いやいや、おもしろくなりそうだ」

「……」

無言でコーヒーをすする駆。

「ん？　どうしたんだい駆。元気ないじゃないか」

「……別に」

「もしかして、あの彼の事気にしてるのかい」

「……」

「気にしてもしょうがないよ、なにせ――」

――彼は君が何かしてもしなくても結局は失敗したんだから。

「……」

「……？　どういうことよ、ソレ？」

「そのままの意味だよ。ハイア・セルテス・ガードナの計画は絶対に成功しなかったろうね、駆がいてもいなくても」

「なんでよ、そこそこ優秀だったんでしょう？」

「そうだね、そしてその優秀さがあだになったんだよ」

「……？」

「……」

首を傾げるシャオ。

無言の駆。

そして――笑っているライアス・デライト。

「彼の術式はさ、対象を影の虚数空間に引きずり込み、『何もない空間に何かがある』という矛盾をもって崩壊させるていうものだったけどさ、それには『何もない空間』と『何か』が同等でないといけないんだ」

『何もない空間』の方が大きければ文字道理何もなくなり。

『何か』の方が大きければその何かが残るのだ。

前者なら問題ないが、後者ならその術式は無効化される。

そして、

「そして、彼は学園全体、つまり生徒教師全員を消そうとしたんだよね」

「それって……」

「……」

シャオは何かに気付いたように。
駆は目を伏せ、何も言わず。

「そう。生徒に教師の九割が何かしらの異能持ちであるあの学園を消そうとしたんだ」

理由は駆は知らない。
ライアスやシャオは何か知っているようだが決して口を開かない。
それでも。
ほとんどが無自覚で未覚醒ではあるもの。
明成学園の生徒や教師は能力者なのだ。
黒崎駆のような術式を使う術者はほとんどいないが、長光カンナのような能力者は大量にいる。
ゆえに。
もし、その存在全てを一個人が作りだした虚数空間に引きずり込んだとしても。

「能力者ってことは異能の分だけ存在の力が水増しされる。異能が強ければ強いほどに、ね。あそこには結構強い能力者もいるから彼の術式が作動したとしても……」

「結局は虚数空間の容量を越えて術式は失敗ってわけね」

「それどころか失敗の時には少なからず存在の力が逆流して術者に流れ込む。そんなことになったら、一瞬で過剰容量で死ぬよ」

報われない話だねぇ。

「もし、そんなことになったら彼はどういう気持ちで死んだんだろうね？　実際は君を嘲笑って死んだらしいけど。いったいどっちが惨めだったんだろうね」

ねぇ、駆。

「君は彼を殺したけどそれはもしかして――」

「どうでもいい、そんなことは」

ライアスの言葉を遮り、コーヒーを飲み干す。

「ただ、俺がアイツを殺した。それだけで十分なんだよ」

席を立つ。

「ハッ。相変わらず冷めてるわね、アンタ」

「まぁ、気持ちもわからなくないけどね」

小銭を置いて出入り口目がけて歩く。

「けどさ、駆。今回術式が仕掛けられたのは君の落ち度だぜ」

扉に手を掛けようとして止まった。

「君はさ、絶対に彼女を守りきるって決めたんだろ？　なら、彼女が危険にさらされる可能性は全て排除しないと」

「まったくね。アンタには失敗は許されないのよ？」

なにせ、

「『守護の魔法使い』であるこのライアス・デライトが」

「『破壊の特異点』であるこの少・苺鈴が」

君を手助けしてるんだからさ。
アンタに力貸してんだから。

「ああ」

二人の言葉に。

「わかってるさ」

宣誓のように応えた。

希望

ライアスから受け取ったメモを見て、自宅ではなく街の中心部の駅へと足を向ける。
すこし速足で歩いていたら、

「あれ、黒崎君？」

足を止める。振りかえれば、

「こんにちは……じゃなくてこんばんはかな？」

「……ああ、そうだろうな」

いつかの夕方のように雪村沙姫はいた。

・・・・・・

歩く。しかし先ほどよりも遅い。
隣に雪村沙姫がいるからだ。
駆は駅に。
沙姫はその近くの文房具屋に用があるとの事で自然と一緒に歩いていた。
もっとも。

「……」

「……」

会話は無いが。
いつかと同じように一歩ずつ踏みしめるように歩く。
この前よりも目的地が遠いのは駆にとっていいことなのか。
気が付けば駅の前だった。
自分から別れようと足を踏み出そうとして、

「ああ、そうだ。黒崎君」

「……どうした？」

沙姫が思い出したように口を開いた。

「クリスマスにね、家でクリスマスパーティーやるんだけど黒崎君もどう？」

「俺は……」

クリスマスと言う事は二日後。
はっきり言うと行けないのだ。
先ほどライアスからもらったメモは仕事の依頼だ。
普段、カンナと行う魔獣討伐のようなものではない。
陰陽寮の手配書の魔獣や罪人の討伐だ。
今回は東北まで出向いてイ種の陰陽師の捕縛又は殺害。
イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ・トの六段階で戦闘力が評価される陰陽寮の最高位。
この類の相手となると駆の終業の意味合いが強いので一人で戦う。
本来なら一週間ほどは掛るので、
……さすがにキツイな……。
だから断ろうとして、

「出来れば来てほしいんだけどね……」

「……っ」

何も言えなかった。
沙姫が少しだけ。
ほんの少しだけ寂しそうな顔をしたからだ。
だから、思わず。

「……わかった、行くよ」

そう言ってしまったのは仕方がないと思う。
……まぁ、何とかなるだろ。

「……本当？」

「ああ」

「そっか……」

彼女は驚いて目を細め、

「楽しみにしてるね！」

彼女にしては珍しい浮かれたような。
満面の笑みを浮かべた。
「……ぁ」
その笑顔を見て、ふと思った。
つい最近、リーシャに自分が戦うのはただの自己満足の為だといった。
……でもそれだけじゃなかったかもな。
「ん？どうしたの、駆くん？」
「いや……」
別にいまさら愛だとか恋などと語るつもりはない。
そんなことは黒崎駆にはわからないのだから。
それでも。
「なんでもない、俺も楽しみにしてる」

「――うん」

それでも彼女の。

沙姫のこの笑顔を何度でも見てみたいと。
そう想った。
この笑顔を守る為に戦っていると。
そう、想えた。
少しだけ、笑うことができた。。

「じゃあな」

沙姫に背を向け駅へと向かう。

「うん、がんばってね」

背に温かい声を受け取って。
そして――――。

「いってらっしゃい、駆くん」
「ああ、いってくるよ。沙姫」

希望（後書き）

第一章、完。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6765y/

悪魔はあの日の約束を忘れずに

2011年11月20日18時27分発行